

V 國際交流

V 国際交流

1. <観点>国際交流の理念と目標

(1) 国際交流の理念

本学は、「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」、「実学の重視」という教育の理念を培ってきた。すなわち、それぞれの時代の課題を引き受け、新しい道を切り開くこと、思考の閉鎖性を脱却し、広い視野と高い見識を求めること、そして豊かな人間性と高い知性を涵養しつつ、高度な専門的知識を修得することを目指してきた。これらの理念は、本学における国際的な連携及び交流活動にも具現化されており、その大きな特徴として、国際的な広い視野のもとで常に新たな国際化活動の地平を切り開きつつ、同時に国際社会の営みとの有機的な連携を追及してきたことがあげられる。それは大学間交流や国際的研究連携から外国人研究者や留学生の支援に至るまで、多岐にわたって結実している。

現在、地球規模での問題となっている新興・再興感染症問題や環境問題の解決、食の安全の確保、動物との豊かな共存の社会の実現のためには獣医学分野の貢献が欠かせないものとなっている。そのため、獣医学分野において、国際的な視野を持った人材の育成が求められており、そのニーズにこたえることのできる教育・研究の体制を構築し、様々なレベルでの国際交流の促進を目指す必要がある。

(2) 国際交流の目標

獣医学研究科・獣医学部では、学生及び教員の活発な国際交流を推進する。また、その円滑な交流実施のための体制を構築する。

2. <観点>国際交流の実績

(1) 協定の締結状況

(観点に係る状況)

海外大学との交流協定は近年も着実に増えており、継続的かつ実質的な交流が行われている。責任部局として5大学、関連部局は9大学、部局間協定は14大学等と締結している。地域的には、部局間協定の場合、アジアが7校、アフリカが3校、欧米が3校である。特に北海道大学大学院獣医学研究科とザンビア大学獣医学部との交流は長く、1991年の部局間協定に始まって、2011年には大学間協定に発展した経緯を持つ(資料43)。

資料43 獣医学研究科と海外大学との協定の締結状況

a. 大学間協定(獣医学研究科が責任部局となっている協定)

国名	協定大学名(所在地)	大学間締結年月日
スリランカ	ペラデニヤ大学(ペラデニヤ)	2006年11月14日
モンゴル	モンゴル国立農業大学(ウランバートル)	2009年1月26日
インドネシア	ガジャマダ大学獣医学部(ヨクヤカルタ)	2010年7月23日
英国	エジンバラ大学獣医校(エジンバラ)	2011年2月23日
ザンビア共和国	ザンビア大学獣医学部(ルサカ)	2011年3月18日

b. 大学間協定（獣医学研究科が関係部局として加わっている協定）

国名	協定大学名（所在地）	大学間締結年月日
アメリカ合衆国	アラスカ大学（フェアバンクス）	1986年12月20日
	ウイスコンシン大学マディソン校（マディソン）	1987年4月21日
	オハイオ州立大学（コロンバス）	1998年9月1日
大韓民国	ソウル大学校（ソウル）	1997年10月1日
	全北大学校獣医科大学（全州）	2000年2月9日
スイス	ジュネーブ大学（ジュネーブ）	2005年6月7日
タイ	マヒドーン大学（サラヤ）	2008年11月26日
サウジアラビア王国	キング・アブドゥルアジーズ大学（ジェッダ）	2010年7月8日
台湾	国立中興大学（台中）	2012年3月14日

c. 部局間協定

国名	協定大学名（所在地）	部局間締結年月日
ザンビア共和国	ザンビア大学獣医学部（ルサカ）	1991年12月5日
インドネシア	ガジャマダ大学獣医学部（ヨクヤカルタ）	2008年8月26日
台湾	国立中興大学（台中）	2008年12月18日
英国	エジンバラ大学獣医校（エジンバラ）	2009年7月24日
インド	バラチダサン大学動物科学院（ティルチラパッリ）	2010年8月23日
ドイツ	ミュンヘン大学獣医学部（ミュンヘン）	2011年4月1日
	ベルリン自由大学獣医学部（ベルリン）	2012年8月1日
エジプト	ザガジック大学獣医学部（ザガジック）	2012年3月6日
アメリカ	コーネル大学獣医学部（ニューヨーク州イサカ）	2013年3月25日
モンゴル	モンゴル国立農業大学（ウランバートル）	2009年1月26日
	モンゴル国立農業大学獣医学研究所（ウランバートル）	2013年5月7日
	国立人獣共通感染症センター（ウランバートル）	2014年1月17日
ガーナ	クワメエンクルマ科学技術大学理学部（クマシ）	2013年7月26日
ミャンマー	ミャンマー獣医科学大学	2013年10月7日

出典：庶務担当データ

(2) 教員・学生の交流状況

(観点に係る状況)

1) 教育

研究科では優秀な留学生の獲得と授業の国際化をめざしており、平成 25 年の時点で、大学院（博士課程）の留学生は 40%を超えており、授業の英語率は 50%を超える（「研究科 II 教育」の項参照）。また、大学院への進学以外にも、資料 44, 45 に示すとおり、複数の大学との交換留学の実績がある。後述する学生の海外派遣のプログラムも充実しており、平成 25 年度からは海外大学との単位互換プログラムも開始された。

2) 研究

また、獣医学研究科では毎年延べ人数 50 名前後の外国人研究者の受け入れを行っているが、アジア地域からの受け入れが最も多く、平成 22 年度から平成 25 年度までの延べ数 232 名中 99 名を占めている。次いで米国・中南米（49 名）、アフリカ（45 名）となっている。一方、派遣人数は年々増加しており、平成 25 年度では延べ人数で 100 名を超えている。平成 22 年度から平成 25 年度の派遣先延べ人数は、アジアが 170 名で最も多く、次いで欧州（103 名）、米国・中南米（86 名）、アフリカ（77 名）となっている（資料 46, 47）。

3) 体制

研究科が実施する国際交流は国際交流委員会によって取りまとめが行われている。また、外部資金による各事業プログラムでは、国際連携推進室がそのサポートにあたり、円滑な国際交流を図っている。

資料 44 学生の海外派遣実績（学部）

年 度	エジンバラ大学	ザンビア大学	ミュンヘン大学	ヨハネスブルク大学
平成 22 年度	8 (11 日間)			
平成 23 年度		1 (17 日間, SSSV)		1 (24 日間, SSSV)
平成 24 年度		3 (14 日間, SSSV)	2 名 (10 日間)	
平成 25 年度	9 (2 週間)			

出典：教務担当データ

資料 45 留学生の受け入れ実績（大学院入学以外を示す，大学院の留学生については「研究科 II 教育 資料 11」参照）

年 度	エジンバラ大学	ボゴール農業大学	カセサート大学(タイ)	忠南大学(大韓民国)	ソウル大学	ヨハネスブルク大学
平成 22 年度		1 (1か月)		1 (11か月)		
平成 23 年度			1 (11か月)		1 (正規課程学部学生)	
平成 24 年度	2 (1週間)	2 (1か月, 学部特聴生) 1 (11か月)				2 (博士課程の特研究生, SSSV, 1ヶ月半1名, 2ヶ月半1名)
平成 25 年度						

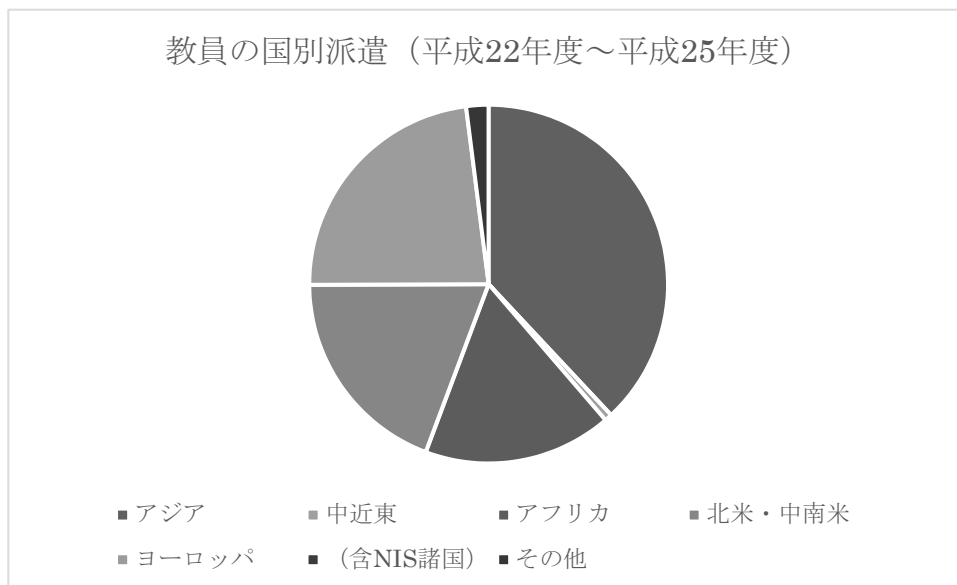
出典：教務担当データ

資料 46 教員の海外への派遣延べ人数

地 域	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	合計	
アジア	25 (25)	36 (35)	64 (64)	45 (45)	170	(169)
中近東	0 (0)	0 (0)	1 (1)	2 (2)	3	(3)
アフリカ	16 (15)	8 (7)	23 (23)	29 (27)	76	(72)
北米・中南米	9 (5)	29 (25)	25 (24)	23 (18)	86	(72)
ヨーロッパ (含NIS諸国)	30 (29)	29 (28)	15 (15)	29 (27)	103	(99)
その他	4 (2)	3 (3)	1 (1)	1 (0)	9	(6)
合計 (人)	84 (76)	105 (98)	129 (128)	129 (119)	447	(421)

() 内は 30 日以内の短期派遣数

出典：庶務担当データ

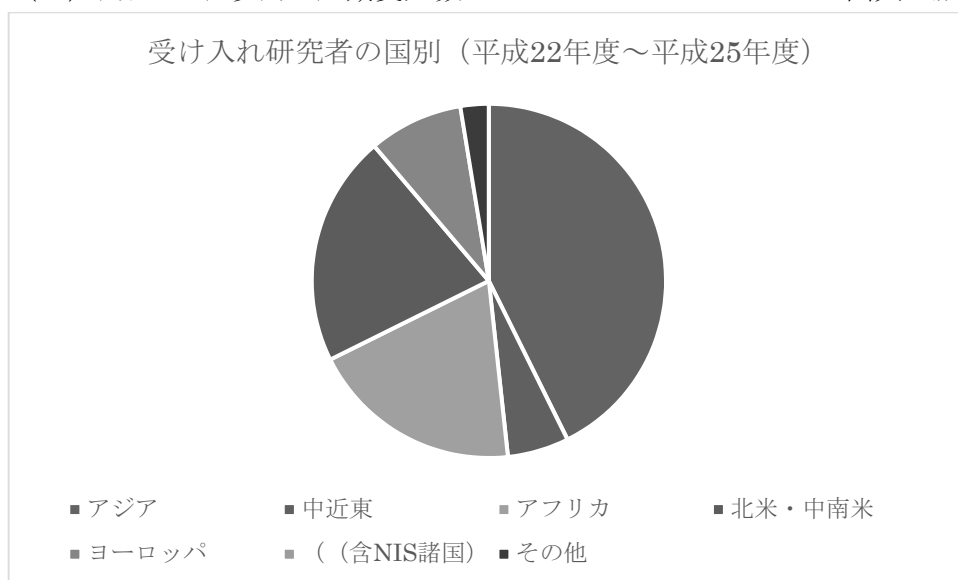


資料 47 外国人研究者の受け入れ延べ人数

地 域	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	合計	
アジア	32 (27)	23 (13)	11 (0)	33 (26)	99	(66)
中近東	0 (0)	0 (0)	13 (12)	0 (0)	13	(12)
アフリカ	2 (0)	10 (7)	18 (8)	15 (4)	45	(19)
北米・中南米	10 (10)	9 (6)	14 (9)	16 (14)	49	(39)
ヨーロッパ (含NIS諸国)	5 (5)	3 (3)	9 (8)	3 (2)	20	(18)
その他	3 (3)	1 (1)	2 (2)	0 (0)	6	(6)
合計 (人)	52 (45)	46 (30)	67 (39)	67 (46)	232	(160)

() 内は 30 日以内の短期受入数

出典：庶務担当データ



(3) 国際学会・会議等における発表 (観点に係る状況)

国際学会での発表件数は1年あたり50件前後である。中でも、国際会議での招待講演数は特に多く、研究科教員は毎年10件前後の招待講演を行っている(Ⅲ研究 4. 研究成果の状況 資料 37, 資料 38 参照)。

(4) 国際学会, 国際シンポジウム, 国際研究集会等の主催状況 (観点に係る状況)

国際集会は1~4件, 平成22年から25年にかけて毎年行われており, 国内だけではなく, 海外においても継続的に国際シンポジウムなどを主催している点が特徴的である。

資料 48 国際学会、国際シンポジウム、国際研究集会等の主催状況

	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度
国内開催件数	3	2	0	1
国外開催件数	1	1	1	1
合計	4	3	1	2

出典：庶務担当データ

【観点ごとの分析】

数多くの海外大学や研究機関と戦略的に大学間、あるいは部局間交流協定を結び、多くの教員・学生の派遣・受入や国際シンポジウム等の開催をとおして実質的で活発な国際交流を行っている。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

(水準)

期待される水準を大きく上回る。

(判断理由)

これまで多数の海外大学と国際交流協定を締結し、活発な学生及び教員の相互派遣や国際共同研究を実施してきたため、期待される水準を大きく上回ると判断した。

(改善方策)

今後、ダブルディグリーやジョイントディグリーなど、より高いレベルでの教育交流を実施するための検討を行っていく予定である。

3. <観点>主な国際交流

【観点ごとの分析】

獣医学研究科では、個別の海外との共同研究のほか、研究科として下記の国際交流を実施している。

(1) 人獣共通感染症の教育と研究

感染症には国境はなく、インフルエンザ、エボラ出血熱、SARS、結核、プリオン病などの人獣共通感染症の存在は、常に人類社会の脅威となっている。平成 21 年の H1N1 インフルエンザのパンデミック、平成 23 年の病原性大腸菌 O-104 による腸管出血性感染症に代表されるように、人類は常に新興・再興感染症との戦いを続けなければならない。また、平成 22 年に発生した口蹄疫や豚コレラに代表される越境性感染症は、社会に甚大な経済的損害を与え、動物性タンパク質の供給を脅かす脅威となることが改めて認識された。

獣医学研究科では人獣共通感染症リサーチセンターとともに展開したグローバル COE プログラム「人獣共通感染症国際共同教育研究拠点の創成」(平成 20 年～平成 24 年)の活動を通じて培ってきた感染症分野での教育研究の実績、16 カ国以上の国の教育研究機関との国際ネットワークは堅牢であり、人獣共通感染症分野では、人的資源、知的及び技術的資源、施設等を含めて国際的に卓越したオンリーワンを目指すにふさわしい、

傑出した資源を有している。さらに、国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム（平成 18 年～平成 22 年）、若手研究者インターナショナルトレーニングプログラム「動物・人・食品をめぐる感染症リスク評価に関するグローバルトレーニング」（平成 20 年～平成 23 年）、組織的な若手研究者等海外派遣プログラム「先進的獣医科学教育・研究における国際的な次世代リーダーの育成」（平成 22 年～平成 25 年）などの国際化の推進を目的としたプログラムの展開により、外国人大学院生の獲得、大学院授業の英語化の推進、及び日本人大学院生の海外活動を推進し、先進的な国際感覚を有する大学院を構築してきた。国際舞台をフィールドとした実践研究、及び連綿とした国際的教育研究活動の実績を資源とした本プログラムの推進は、感染症病原体の克服に向けて地球規模で human-animal-ecosystem interface を対象とした実践的な大学院教育を展開する上で、揺るぎない優位性を有する。長期海外共同研究支援、及び海外疫学活動支援を通じて若手研究者を派遣した国は、アメリカ、イギリス、スイス、オランダなどの先進諸国から、ザンビア、スーダン、スリランカ、マレーシア、ベトナム、インドネシア、モンゴル、ミャンマーなど 16 カ国以上になる。これらの国では、海外活動のカウンターパートとなる機関及び研究者との間で信頼できるネットワークが構築されており、グローバルな教育研究を展開する拠点として機能している。

（2）アフリカにおける環境毒性学の研究ネットワークの構築

近年、先進国及び新興国等の開発により、アフリカ諸国では急激な資源開発が進められている。しかしながら、同時にかつてないスピードで環境の汚染が顕在化し始めている。一方で、急激に進むアフリカ諸国の環境汚染に関してはごく限られたデータしか報告されておらず、アフリカにおける環境汚染の現状は殆ど把握されていない。特に、問題となっているのは、生態系や動物、ヒトに対する毒性学的なサーベイランスが実施されていないことであり、これが対策の遅れを生んでいる原因の一つとなっている。環境の汚染はすでに数カ国で食の安全を脅かすレベルにまで亢進していることもわかっており、環境汚染によるケミカルハザードは各国における喫緊の課題となっている。

研究科では、平成 22 年から平成 25 年を含む、平成 21 年度から平成 26 年度の間に、日本学術振興会の「アジアアフリカ学術基盤形成事業（アフリカ大陸における野生動物医学とケミカルハザードサーベイランスの学術基盤形成）」（平成 21 年度～平成 23 年度）、「研究拠点形成事業・アジアアフリカ型（アフリカ 8 カ国との国際トキシコロジー・コンソーシアムの形成）」（平成 24 年度～平成 26 年度）を推進し、アフリカの環境汚染の調査・研究に関するネットワークを形成するために「国際トキシコロジーシンポジウム in アフリカ」と題した国際シンポジウムを毎年アフリカ諸国において開催してきた（資料 49）。このシンポジウムを介して、各国の毒性学研究者らが活発な意見交換を行い、最終的には 10 カ国以上のアフリカ諸国から研究者や大学院生らが参加し、アフリカの各大学・研究機関における毒性学をボトムアップする為のエンジンの役割を果たしてきた。また、環境研究のブラックボックスとなっているアフリカ諸国から共同サーベイランスによるデータを蓄積し、環境毒性学の基盤データを構築してきた。

資料 49 事業により派遣及び受け入れた人数（海外の研究者を含む）

	平成21年(参考)	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年	平成 25 年
派遣人数 (人/人日)	14/125	18/142 (15/320)	23/242 (18/378)	37/334 (32/1167)	30/204 (17/1697)
(カッコ内は当該事業に関連して別経費より支出分)					
派遣国数	3 か国	4 か国	5 か国	5 か国	4 か国
シンポジウムの実施国	ザンビア共和国 (ザンビア大学, ルサカ)	ザンビア共和国 (ザンビア大学, ルサカ)	ザンビア共和国 (ザンビア大学, ルサカ)	ザンビア共和国 (ザンビア大学, ルサカ)	ガーナ共和国(ク ワメエンクルマ 科学技術大学,ク マシ)
交流国(派遣・受け入れなど)	ザンビア共和国 ガーナ共和国 ナイジェリア 南アフリカ共和国 ケニア タンザニア	ザンビア共和国 ガーナ共和国 エジプト ナイジェリア 南アフリカ共和国 ボツワナ ケニア カメルーン タンザニア ベナン	ザンビア共和国 ガーナ共和国 エジプト ナイジェリア 南アフリカ共和国 ボツワナ ケニア カメルーン ウガンダ スーダン	ザンビア共和国 エチオピア ガーナ共和国 エジプト 南アフリカ共和国 カメルーン スーダン ナイジェリア ケニア ウガンダ ジンバブエ ブルキナファソ タンザニア	ザンビア共和国 エチオピア ガーナ共和国 エジプト 南アフリカ共和国 カメルーン スーダン ナイジェリア ケニア ウガンダ タンザニア コンゴ (DRC)

出典：庶務担当データ

(3) ソウル大学とのジョイントシンポジウム

獣医学研究科ではソウル大学とのジョイントシンポジウムを継続的に行っている。このシンポジウムでは、毎年、獣医学領域からテーマを厳選し、教員及び学生を隔年で相互派遣して、人材交流と情報の交換を図っている（資料 50）。

資料 50 北海道大学・ソウル大学ジョイントシンポジウムのテーマと参加者の概要

開催日	場所	テーマ	参加者
第 13 回 平成22年11月 25日～27日	北海道大学	Towards Infectious Disease Control (感染症の制圧に向けて)	【北大側】56名(内訳:教員15名, 研究員等9名, 大学院生23名, その他9名) 【ソウル大側】4名(内訳:教員4名)
第 14 回 平成23年11月 17日～19日	ソウル大学	Annual Exchange in Veterinary Medicine (獣医学分科会シンポジウム)	【北大側】9名(内訳:教員5名, 大学院生2名, その他2名) 【ソウル大側】26名(内訳:教員10名, 大学院生1名, その他15名)
第 15 回 平成24年12月 6日～8日	北海道大学	The leading edge of veterinary clinical sciences (臨床獣医学研究の最前線)	【北大側】36名(内訳:教員12名, 研究員等3名, 大学院生12名, 学部生9名) 【ソウル大側】5名(内訳:教員5名)
第 16 回 平成25年12月 12日～14日	ソウル大学	Current Advances in Veterinary Bioscience (獣医バイオサイエンス分野における最近の研究課題)	【北大側】7名(内訳:教員6名, その他1名) 【ソウル大側】25名(内訳:教員8名, 大学院生10名, 学部生5名, その他2名)

出典：庶務担当データ

(4) アジアにおける獣医学医療の国際教育

「大学の世界展開力強化事業 日本とタイの獣医学教育連携:アジアの健全な発展のために」は、タイあるいは日本の獣医学、文化及び社会を学習しかつ体験することによって (1) アジア全体を俯瞰できるグローバルな発想・思考力と英語でのコミュニケーション能力, (2) 獣医学の専門家として国際的に通用する知識と技能を有する獣医師, 獣医学教育者及び研究者の養成を目指す。感染症の制圧, 食の安全, 環境保全などは一国のみで取り組むことができないことは明らかであり, わが国民の安心・安全はアジアあるいは世界というより大きなフレームで捉えなければならない。本プロジェクトの最終目的はアジア各国で検疫, 公衆衛生, 動物診療などに従事している獣医師及び獣医学研究者がグローバルな意識と高度な知識・技術でこれらの諸問題に対処し, 発生国内で速やかに解決できる基盤を整備することである。

本事業では, 日本 (北海道大学, 酪農学園大学, 東京大学)・タイ (カセサート大学, チュラロンコン大学) 間の学生相互の派遣と受け入れ, 単位の互換制度を整備し, 獣医学連携の強化を目指し, 最終的にアジア全域の獣医師のレベルアップに結実することになる。この事業は平成 25 年度 11 月より開始され (準備期間), 平成 26 年度には日本から 3 大学合わせて 26 名のタイへの派遣, カセサート大学から 25 名の日本への受け入れを行い, 単位の互換を行った。獣医学領域において, このような実質的な単位互換を大規模の人数 (国立大学の学部学生の人数は 1 大学 30~40 名/学年) で実施するのは国内でも初めての試みであり, 各大学の強みを生かした国際色豊かなプログラムとなっている。

(5) エジンバラ大学との獣医学交流

大学間及び学部間学術交流協定に基づき, 北海道大学及びエジンバラ大学獣医学部間での学生交流を主体とした教育交流を推進することが本事業の目的である。両大学各々の特徴を活かした教育プログラムを受講・経験させる学生交流を定期的かつ継続的に実施しており, 本学の獣医学部生が英国での高度かつ世界レベルにある獣医学教育の一端を経験するとともに, 獣医学を学ぶ異国の学生との交流を介して英語力の涵養と異文化の理解を深めることにより, 国際的な視野を持った獣医師に育つことを目指している。さらに, 大学院生を含む若手研究者の研究レベルの向上ならびに大学院教育プログラムの情報交換を目的とした教育研究交流を深めることも目指している。

本事業は研究科の自主財源による事業であり, 1) エジンバラ大学及び北海道大学の獣医学部生を対象にした派遣・受入の国際交流, 2) 同大学間での大学院生を含む若手研究者の教育研究交流を行う。1) については, エジンバラ大学では小動物 (イヌ, ネコ), 大動物 (ウシ, ウマ) 及びエキゾチック動物の臨床獣医学を, 北海道大学では人獣共通感染症学や野生動物学等の分野を主な教育プログラムとしている。毎年, 交互に派遣と受入を繰り返し, 各 10 名ほどの獣医学部生に対して各々特徴ある教育プログラムを毎年 2 週間, 提供している。

海外の獣医療最先端の大学における教育現場で実際にそこで行われている教育プログラムに参加する経験は, 北大学生にとって当地の学生がもつ学習モチベーションや意欲を Face to Face で学ぶことを含めてその教育コース全体に対する理解が直接得られるものとなり, 教育内容の国際化推進の観点からも教育効果が大きい。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

（水準）

期待される水準を大きく上回る。

（判断理由）

獣医学として貢献すべき国際的な諸問題を解決するために様々な国際的プログラムを推進している。いずれのプログラムも継続性があり、国際的なネットワークの構築を着実にやっていること、多くの人材を育成してきたことから、期待される水準を上回ると判断した。

（改善方策）

今後も海外における活動拠点の構築を利用した国際交流を発展させる。なお、以下のプログラムは現時点（平成 26 年 2 月）も継続している。

大学院博士課程リーディングプログラムでは One Health の目標のもとに、感染症制圧のための感染症対策専門家養成コースを行っており、コース修了者・試験合格者に北海道大学からの認証を授与している。この大学院のカリキュラムには新たにケミカルハザード対策専門家養成コースも設置され、人材の育成に努めている。

アフリカにおける環境汚染問題に取り組んだ研究拠点形成事業では、平成 26 年度に、これらの活動を継続するために日本とアフリカ 8 か国からなるコンソーシアムを構築した。また、これまでの成果が認められ、平成 27 年度～平成 29 年度も新たに、研究拠点形成事業として「ケミカルハザード問題の克服に向けた国際コミッション CHCA の設立」が採択され、アフリカにおける研究ネットワークの構築を推進することとなった。

大学の世界展開力強化事業は、平成 26 年度に 25～26 名の日本人及びタイ人学生の単位互換を行った。このプログラムは、平成 29 年度まで継続する予定であり、今後も活発な学生交流が期待される。

ソウル大学との交流シンポジウム、エジンバラ大学との国際交流は今後も継続していく予定である。特にエジンバラ大学との交流は、獣医学部における国際認証取得に向けたカリキュラム改善とも連携し、今後、相互の特徴と強みを活かし、さらに伸ばし得るプログラムに発展させることが可能である。

4. <観点>国際貢献の状況

【観点ごとの分析】

（1）国際貢献の状況

国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムの外国人留学生特別枠（4～5 名/年、平成 18 年度から現在）を活用して、外国人留学生を北海道大学大学院獣医学研究科に受け入れた。この特別プログラムの実施に伴い、シラバスを英語化し、英語による講義・実習を増やし、英語で実施する科目のみを履修することにより大学院博士課程修了要件の単位を取得できるカリキュラムを構築するなどの改革を行ってきた（平成 19 年度から実施）。

また、人獣共通感染症にかかる教育では、次世代の人獣共通感染症の教育・研究に携わる若手研究者の育成を最大の目標にかかげ、若手研究者の研究能力の向上、国際性の

涵養を目的とした活動を展開してきた。例えば、海外の若手研究者や技術者の教育プログラム“Advanced Training Course for Zoonosis Control”を実施するなど、国際的な研究者育成と国際ネットワークの構築に傾注してきた。さらに、当プログラムに「人獣共通感染症対策専門家（Zoonosis Control Expert）認定プログラム」を設置して、高度な専門性をもって人獣共通感染症対策に貢献できる専門家の育成に務めた。このプログラムは大学院リーディングプログラムにおいても継続して実施しており、博士課程修了者を人獣共通感染症対策専門家として毎年輩出している。

環境毒性学分野では、平成 21 年度より継続して短期トレーニングによる外国人の受け入れを行っており、このトレーニングプログラムは、平成 24 年度に開始した大学院リーディングプログラムからは「ケミカルハザード対策専門家特論」として大学院授業の一つとしてカリキュラムに取り入れられている。

【分析項目の水準と判断理由・改善方策】

（水準）

期待される水準を大きく上回る。

（判断理由）

獣医学分野の貢献が求められている多くの地球規模の諸問題に対して、研究を推進し、また人材の育成にも寄与している。独自の認定プログラムを策定するなど、積極的な活動を行ってきたことから、期待される水準を上回ると判断した。

（改善方策）

今後も国際的に解決が求められる諸問題に対して、研究の推進、ネットワークの構築や人材の育成を行っていく。